

# 花と人の話

小川未明

青空文庫



真紅まつかなアネモネが、花屋はなやの店みせに並ならべられてありました。同じ土おなじつちから生まれ出でた、この花はなは、いわば兄きょうだい弟にいともいうようなものでありました。そして、大空おおぞらからもれる春はるの日の光ひかりを受けていましたが、いつまでもひとところに、いつしよにいられる身みの上うへではなかつたのです。

やがて、たがいにはなればなれになって、別わかれてしまわなければならなかつた。そして、たがいの身みの上うへを知しることもなく、永えい久きゆうにふたたびあうことは、おそろくなかつたのであります。甲こうのアネモネの鉢はちは、赤あかい色の素焼すやきでした。乙おつのアネモネの植うわっている鉢はちも、やはり同じ色おなじいろをしていました。丙へいのアネモネの鉢はちは、黒くろい色の素焼すやきでありました。この三つの鉢はちは並ならんでいました。そして、あたりは静しずかであつて、ただ、遠とおい街まちの角かどを曲まがる荷車にぐるまのわだちの音おとが、夢ゆめのように流ながれて聞きこえてくるばかりであります。

このとき、甲こうのアネモネは、  
 「いまにも、だれかきて、私わたしたちを買かつていつてしまうかもしれぬ。なんと私わたしたちは、はかない運命うんめいでしょう。私わたしは、あの黒くろい、広ひろい、圃はたけがなつかしい。昔むかし、みんなして、あの圃はたけの中に生まれて顔かおを出だしたあの時分じぶんが、いちばん樂たのしかつたと思おもいます。」といいま

した。

「ほんとうに、あの時分じぶんが、いちばんたの楽しかったですね。風かぜは寒さむかったけれど、朝晩あさばん、日の光ひかりは、弱よわく、悲かなしかったけれど、そして夜よるには、霜しもが降ふって、私わたしたちを悩なやましたけれど、やはり、あの時分じぶんがいちばんよかったように思おもいます。」と、丙へいの анемоネがいました。

二つの анемоネの話はなしを黙だまって聞きいていた、乙おつの анемоネは、顔かおを上げ、

「私わたしたちは、どこへゆくでしょう。どうかかわいがってくれる人ひとの手に渡わたりたいものですね。おそらく、いっしょにはいられないでしょう。たとえば、もう二度どと顔かおが見みられなくても、おたがいにしあわせであればいいのです。けれど、みんなが同おなじようにしあわせであることはできないであります。」といいました。

そのうちに、人ひとの足音あしおとがしました。三つの анемоネは黙だまってしまいました。なんとなくおそろしいような、また気きづかわれるような気持きもちがしたからです。それは、美うつくしい令嬢れいじょうたちでありました。ぜいたくなようすをしていました三人にんの令嬢れいじょうは、店みせさきに立たって、そこにあるいろいろな花はなの上うえに、清きよらかなりこうそうな瞳めを移うつしていました。

「あのリリーもいいことよ。」

ひとり  
一人の令嬢が、こういいますと、ほかの一人は、

「わたし、カーネーションが好きよ。」と、片すみにあつた淡紅色の花をを目指していました。

「アネモネにしましょうね、いま咲きかかったばかりなのですもの。」と、三人の令嬢の中のいちばん年上のがいいいました。

すると、ほかの二人は妹たちであります。みんなその姉さんのいうことに従いました。アネモネは、たがいに、心の中で、このやさしい令嬢たちの手に渡ることを願っていました。どんなにやさしく取り扱われ、またかわいがられるであろうと思つたからです。

令嬢の一人は、甲のアネモネを取り上げました。

「どうぞ、これをくださいな。」と、買って、甲のアネモネが持ち運び去られるとき、あとの二つのアネモネは、

「さようなら。さようなら。」と、見送りながらいました。そして甲のアネモネが、どこへゆき、どんな生活をしたか、二つのアネモネは、知りませんでした。ただ、甲のアネモネは、幸福に日を送るであろうと想像したのでした。

令嬢たちは、アネモネを家に持ち帰りました。それはりっぱな西洋館でありました。広い、日のよく当たる庭があつたけれど、そこにアネモネを置かず、ある一室の内に運んで、ピアノの置いてあるそばの台の上に、それを置きました。室内は明るく、いろいろに装飾がしてありましたが、日の光は、けつしてそこへは差し込まなかつたのです。このことは、花にとつて、このうえない不幸でありました。

三人の令嬢たちは、今夜、このへやで音楽会を開く相談をしていました。そして、あたりを片つけたり、額を懸け換えたり、いくつも腰掛けを持つてきたりしました。あたりの片づけがすむと、一人の令嬢は、アネモネのそばへやってきました。そして、つくづくと花をながめていましたが、やがて美しい顔を花に近づけました。花は、接吻してもらふことかと、うれしそうにふるえていましたが、そうではなかつた。

「姉さん、この花には、ちつとも香いがありませんのね？」

「そうよ、香のあるのは、ヒヤシンスなのよ。」すると、妹は、テーブルの上ののせてあつた香水のびんをとりあげました。そして惜しげもなく、それをアネモネの花といわず、葉といわず、頭からふりかけました。花は、どんなにびっくりしたことでしよう。

「姉ちゃん！ なにするのよ、花が枯れてしまつてよ。」と、一人の令嬢がいました

た。

「だいじようぶよ、今晚だけは枯れはしないわ。」と、妹はいつて、三人の娘たちは、声をたてて笑いました。

アネモネの花は、その夜の華やかな有り様を見る勇氣もなかったのです。水ももらわなかつたから、二、三日して枯れてしまいました。

甲の身の上を空想しながら、花屋の店頭にあつた二鉢のアネモネは、ある日、大學生が、前に立つて、自分たちを見つめて居るのに気づきました。

「日あたりに出してやって、一日に二度も水をやればいいですか？」と、大學生は、きいていました。なんとという氣のつく學生だろうと、アネモネは思いました。

「こんな人が、私をつれていったら、私は、幸福だろう。」と、アネモネは思つたのです。

大學生は、乙のアネモネを買つてゆきました。

「さようなら。ご機嫌よう。」と、後に、ただひとり残された丙のアネモネはいつて、乙を見送りました。

大學生のへやは、じつに乱雑で、書物や雑誌などが、取り散らされてありました。

それでも大学生は、アネモネを大事そうに、机の上のせておきました。  
 大学生は、夜おそくまで、机の上に書物を開いて勉強をしました。そして、朝は起きるのが遅かったのです。

アネモネは、午後の西日が障子の上を照らすのを見たばかりで、自身は、日に照らされることはありませんでした。

花は、あの花屋の店先を、どんなに恋しく思つたでしょう。

下宿屋の女中は、花などには無関心でした。すこしの考えもなくそうじなどをしましたから、赤いアネモネの花は、頭からほこりを浴びさせられました。

大学生は、はじめの二、三日は、花に気をとられながら、ながめたり、水をくれたりしましたが、その後は、忘れてしまったように、水もくれませんでしたから、土は湿り気がなくなつて、花は枯れかかったのです。

ある朝、学生は、起きて、ふと花をながめました。  
 「元気がなくなつたな。」と、学生は、独り言をしました。

ちようどすこし前に、女中が朝飯のお湯を持ってきたのです。  
 学生は、乱暴にも、まだ冷えきらない、暖かなお湯を花にかけながら、

「だいじようぶ枯れはしまい。水を取りにゆくのもめんどうだ。」  
 学生は、こういいました。

しかし、花はそのために、葉がしおれてしまいました。そして、じきに枯れてしまったのです。

甲の身の上、乙の身の上を思つて、最後に残つた丙のアネモネは、しばらくさびしい日を送っていました。

ある日、十二、三になつた男の子が、二人連れでやってきました。

「これはなんという花だい。」

と、一人がいいました。

「アネモネの花だよ。」

と、もう一人が答えました。

「きれいな花だね。」

「これを買つていこうか。」

アネモネは、もしこの子供らに買つていかれたら、どんな乱暴のめにあうかもしれないと、びくびくしていました。

ふたり 二人の子供は、このアネモネを買いました。そして、二人は、さも大事そうにこのアネモネの鉢をかかえて、家へ帰りました。

子供らは、いろいろの花が植わっている庭へ持っていくきました。その庭は、たいそう日当たりがよかったです。ちようもくれば、みつばちもやってきたのです。

子供は、毎朝起きると、すぐに花のところへやってきました。

そして土が乾くと、水をくれました。学校から帰つてくると、花を日のあたるころへ出して、また、そこがかけると、ほかの場所へ移してくれました。

花は、二人の子供にかわいがられました。

花も、子供がやさしいので、すっかり子供が好きになつてしまいました。

そして、長い間その庭で咲いていました。

が、時節がきた時分に、だんだん花は終わりに近づいて衰えてゆきました。「この根をしまつておいて、また来年の春になったら植えて咲かそうね。」

と、二人の子供はいいました。

花は、どんなに、これを聞いてうれしかったでしょう。来年の春も、また、そのつぎの年の春も咲いて、子供と仲よくしようと思ひました。

花<sup>はな</sup>が終<sup>お</sup>わったとき、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>らは、その根<sup>ね</sup>を乾<sup>ほ</sup>してから、これ<sup>これ</sup>を袋<sup>ふくろ</sup>の中<sup>なか</sup>へ入<sup>い</sup>れて、その上<sup>うえ</sup>に「アネモネ」と書<sup>か</sup>いて、しまっておきました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「少女の花」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「花《はな》と人《ひと》の話《はなし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 花と人の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>